宝塚歌劇団　台湾公演を終えて

宝塚歌劇団　制作部
企画室室長　村川　研策

■はじめに

2013年4月14日23時。8年ぶりの宝塚歌劇団海外公演は、台湾の地で大大大盛況のうちに千秋楽の幕を降ろしました。1500人のお客様が総立ちのスタンディングオベーション。4階席から今にも落ちそうな状態で全身全霊の声援を送って頂くお客様、“帰らないで！”と書かれた自作の大きなプラカードを両手で掲げるお客様。皆様から地響きのような拍手と歓声の嵐が続く中カーテンコールが4回にも及ぶ感動的な千秋楽は、業務として毎日興行に携る我々でもめったに経験できるものではありません。あまりにも熱狂的な反応を見せていただいたお客様に、舞台上のトップスターは勿論のこと、出演者全員が感涙の涙顔になっている様に見えたのは、目頭が熱くなった私だけではなかったと思います。「台湾で公演をやってよかった。」と心の底から思った瞬間でした。

思い起こせば宝塚歌劇団台湾公演のプロジェクトが始まったのは2010年秋。本当に沢山の方々に支えられて実現した2年6か月の本プロジェクトの秘話をいくつか紹介しながら、今回の公演の意義をまとめてみたいと思います。

フィナーレ

ⓒ宝塚歌劇団

■重要な目的を果たす海外公演

1938年に初めての海外公演を行った宝塚歌劇団はこれまでに17か国24都市で公演を実施しました。これらは基本的に各国及び日本の両政府から招聘・要請を受け宝塚歌劇団が公演を実施したもので、今回の台湾公演も同様に台湾と日本の両政府からの要請により公演の検討を開始しました。ただ、その時に台湾について十分な知識を有しているプロジェクト担当者はおらず、ビジネスは勿論のことプライベートの旅行で台湾を訪れたことのある担当者もいないという有様でした。そんなおぼつかない状況で情報収集、現地視察を開始したのは2011年初頭のことです。現地で「宝塚歌劇」の認知状況をヒアリングするも具体的な認知度は低く「おばあちゃんに“宝塚少女歌劇”という名前は聞いたことがある。」程度の反応で、特に若い年齢層の方の認知度は非常に低いものでした。

「こんな状況で公演を実施しても」という否定的な意見も出される中、2011年3月に東日本大震災が発生。未曾有の事態に台湾から200億円を超える義捐金が寄贈されたことを知り、公演実現の強い要請を受けている台湾には「支援のお礼」という意義もあるということで開催決定を決意したのです。又、同時に、折角公演を実施するのなら、従来のように文化事業として政府の招聘による1回限りの親善公演に留まらず、今回の台湾公演を、新たな宝塚歌劇のアジアへの展開の布石と位置付け、継続的に公演を実施できるか否かのトライアル的な意義も視野に入れ、歌劇団の歴史上において新しいスキームとなる完全自主興行として台湾での公演すべてにかかわる業務を取り仕切る決意をしたのです。

■手探りの中で…

先にも述べた様に私自信も初めての台湾経験です。何もかも、まさに「手さぐり」の状況でプロジェクトをスタートしたといっても過言ではありません。

宝塚歌劇はコンサートや一般的なミュージカルと比較すると出演者や舞台スタッフは桁違いに多く、使用する舞台道具、衣裳、機材も想像を絶する多さです。更に今回はこれまでの海外公演の中でも最大級である 20 段の大階段を使うことも決定したので、渡航者は 130 名、物量も 40 フィート、コンテナ 18 台の公演規模となりました。このことから物理的に上演可能な劇場を確保することが最初の難問となりました。幾つかの劇場を視察しながら、「台北国家戯劇院」のみが上演可能な劇場と判明したものの、台湾でも大人気のこの劇場を 2 週間にわたり確保することは至難の業。「1 週間なら…」といわれるものの 1 週間では道具の搬入と舞台稽古だけで公演が終わってしまいます。この時に大きな力を貸していただいたのは外交部亜東関係協会の皆さんでした。粘り強い交渉をサポートして頂き、漸く 2 週間の劇場確保が出来たのです。正直、公演を実施する物理的な場所を確保するだけでまさに“へとへと”状態。しかし解決すべきことは山積みでした。

公演を一緒にオペレートしてもらうプロモーター決定やスポンサー獲得、公演内容や座席料金の決定、納税のための税籍登記や現地銀行口座の開設等目まぐるしく意思決定をしていかないといけません。その時々で惜しみない支援、指導、援助を下さったのが(公財)交流協会の皆さん、日華議員懇談会の皆さん、台北駐日経済文化代表処、亜東関係協会の皆さん、台北市日本工商会、台湾日本人会の事務局、所属各企業の皆さん、そしてプロモーターの寛宏演芸や様々な関係者の皆さんでした。すべてがゼロからのスタートでしたので、我々のやり方や流儀に固執するのではなく「郷にいれば郷に従え」の精神を念頭において、すべてのことについて「台湾ではどうしているのですか」と皆様にヒアリングすることからスタート。興行を成功させるために何をすべきか確かめながら社内で検討し、質問や回答を台湾にフィードバックするというとにかく地道な作業を積み重ねていきました。

北京語が誰一人話せない我々を根気よく見守り、サポートしていただいた皆様には心から感謝するとともに、これまでの海外公演では感じられたかった優しさ、温かさ、そしてスムーズに運ぶ色々な議論交渉を思い返すにつけ、関係者の皆様、とりわけ親日的で日本贔屓の台湾の方々からのお力添えあっての台湾公演の成功だということを改めて感じた次第です。現地と初めて「もしもし、ウエイ・ニーハオ、ハローハロー・・・」と言語チャンポンで度胸だけで様々な協議をしていた頃やスポンサー獲得のお願いに伺って台湾人企業幹部の方に「藪から棒にスポンサーのお願いなんかしに来て…」と日本語でいわれて、台湾人の方が話す日本語の語彙に驚くとともに、“藪から棒”といわれて滅入ったこと等、色々なことを懐かしく、そしておかしく思いだされます。

■台湾公演での工夫

文化交流を第一の目的としてスタートした本プロジェクト。我々の宝塚歌劇をきちんと理解してもらわないと交流のスタート地点にもつけません。先ほど述べた様に“宝塚歌劇”の認知度も芳しくない状況に、“タカラヅカ”らしい親しみやすい演目、内容とすることを決め、様々な工夫を検討していきました。

まず演目。やはり日本から来た劇団なので「和物」のショーを演目にいれることにしました。三味線や琴の伴奏ではなく、オーケストラの音楽に合わせて日舞を踊るという我々の特徴をみていただくべく上演したのが、『宝塚日本風（宝塚ジャポ

宝塚ジャポニズム

ⓒ宝塚歌劇団

外伝花盗人

ⓒ宝塚歌劇団

ニズム）～序破急～』です。そして、これぞタカラヅカという演目を楽しんでいただくためレビューやロケット場面を散りばめた洋物のショー『エトワール・ド・タカラヅカ』を上演しようというところまでは簡単に決まりました。

この２演目はショーですので言葉がわからなくてもお客様に十分楽しんでいただけます。通常、日本の宝塚歌劇公演は１公演２幕（２演目）で上演していますのでショー２演目でもいいのですが、出演者が女性だけの劇団で女性が演じる“男性”の格好よさを皆様にお伝えするためには“芝居”が不可欠です。しかし、“芝居”となると言葉の壁が立ちはだかります。字幕をつけるにしてもよりわかり易く、親しみやすい演目を実施しなければと色々と悩みました。そのような背景で生み出されたのが第２幕『怪盗楚留香外伝 花盗人』です。香港の映画ではあるけれど、台湾人の古龍氏の原作で台湾では昔テレビドラマで放映されており、日本でいうところの「ルパン三世」と「水戸黄門」を合わせた様な位置づけで家族そろってテレビで見た台湾人が良く知っているキャラクターだと聞き、「これだ！」と上演を決定した演目です。

ただ、この作品を上演するためには著作権の許諾を頂かないといけません。権利を持っている著作権者を何とか調べ上げ、直接交渉を決意。通訳を介して急遽出版社にアポイントをとり、電撃交渉に向かいました。今回のプロジェクトの意義や目的を丁寧に説明したところ、その場でOK。許諾料についてもそのような意義あるプロジェクトであるならば無償で問題ないと、ここでも台湾の熱い思いに触れる経験をしました。

最終的には芝居「怪盗楚留香花盗人」に台湾の歌、「雨夜花」を挿入、洋物ショー「エトワール・ド・タカラヅカ」には台湾民謡「望春風」や台湾映画「海角七号」の挿入歌「無楽不作」「国境の南」を使用。また、台湾の伝統的な曲でテレサ・テンさんの代表曲でもある「月亮代表我的心」をトップスターの柚希礼音が北京語で歌う等まさに「台湾スペシャル」の内容になるような工夫も盛り込み、可能な限り台湾の皆様に親しみを覚えていただくように作品を仕上げていきました。

エトワール・ド・タカラヅカ

ⓒ宝塚歌劇団

■チケット販売開始、そして公演初日へ

2012年10月末には台北市内で制作発表やトークショーを実施、その後TVCMも放映、MRTの駅への広告出稿や中山北路、敦化北路、忠孝東路や愛国東路へのフラッグ広告の掲出等、これまでの海外公演では経験のない広告宣伝業務も実施しながら、「やれることはした！」という思いと「不安」が混じる中11月5日にはチケット販売開始。蓋をあけてみると、プロモーターの事務所には行列が出来る、インターネットの残席表示はみるみる内に満席になっていくという状況に“うれしい”というよりも“ほっ”とするとともに、本番の失敗は許されないなと関係者一同気持ちを新たにしました。

そして2013年4月いよいよ本番。3月31日深夜から徹夜で道具を搬入。慣れない海外公演ではこの段階でも様々なトラブルが次々と襲いかかってくるのですが、今回の台湾公演は予定通り、いや予定よりスムーズに事が運ばれていくのです。日本からの舞台運営スタッフ、台湾の舞台スタッフ、初顔合わせの人も多い現場で飛び交う指示や相談を通訳者が橋渡しながら準備は進行。舞台の専門用語が混じる難しい会話を細かなニュアンスまで伝えられるよう通訳者は事前に舞台用語の勉強会まで開いて事前学習してきたことなどを知り、これまでの海外公演では考えられないことと目頭を熱くしました。本番を直前にした舞台は徹夜作業や夜遅くまでの作業での疲れと慌ただしさで時には緊張が走ることも…。これまでの海外公演では舞台スタッフ同士の大ゲンカや舞台スタッフが帰宅してしまったというような経験も沢山しましたが、今回は全くそんなことが起こらず日本と台湾のスタッフ全員には“良い舞台を作りたい”という共通の思いが満ち溢れ、双方は話し合いを続けて次々と解決していきました。日本のスタッフは台湾スタッフを“すごい”と褒め、台湾スタッフも日本スタッフの“技術”に感心し、互いが互いをリスペクトするという海外公演ではあまり見ることができない光景を目の当たりにしました。

日台舞台スタッフ最終打合せ風景

そんな非常に雰囲気の良い中迎えた4月6日初日公演…。定刻5分押しで開演、満席の客席から期待が押し寄せる中、北京語での挨拶が流れ、それがトップスター柚希礼音の声と気づいたお客様は大きな拍手と歓声で反応してくださいました。しかしながら、照明が消え着物に身を包んだトップスターが舞台正面に浮かびあがると客席は水を打ったように静まりかえり、舞台上に視線が集中。その集中は45分の「宝塚日本風～序破急～」の間ずっと続き、緞帳が下りると同時に割れんばかりの拍手となりました。続く「怪盗楚留香花盗人」も言葉の壁を越えて、日本で上演する以上に笑いも沸き起こり舞台を理解していただけていることに安堵。そして第3幕「エトワール・ド・タカラヅカ」。緞帳があがり「TAKARAZUKA」と書かれたタイトルの吊物が現れただけで、「待っていました！」というようなお客様の拍手と歓声…。そこから終演までは拍手と大歓声の嵐でした。台湾の皆様からの素直な心からの拍手と大歓声を受けて出演者も驚き、テンションを上げ、演技にも熱が入り、その演技がお客様を更にヒートアップさせ…とまるで化学反応を起こすように舞台が高まっていき、フィナーレでは場内の熱気は最高潮。

お客様を迎えたロビー

悲鳴のようなどよめきが会場を満たす中、出演者代表が義捐金のお礼と宝塚歌劇団台湾公演を実現できた喜びを申し上げる挨拶をさせていただきました。私の隣にいらっしゃった台湾人のお客様が大きくうなずかれながら涙を流しておられる姿を見て、大きな感動を感じるとともに文化交流の使命は果たせたのではないかという安堵と感動を体感した初日公演でした。

■もう一つの交流

こうして台湾公演の初日は想像をはるかに超える大きな感動とともに幕を開けたのですが、初日の盛り上がりが大きすぎたので二日目からはどうなることかと新たな危惧も生まれたものの、お客様の反応はかわりませんでした。むしろ、初日よりも日本からのお客様や関係者の割合が減った分、台湾人のお客様のストレートな反応を感じることが出来ました。千秋楽まで 12 回の全公演が完売。チケットを入手されたものの当日来られないようなお客様が出たらどうしようという心配もありましたが、全くの杞憂で千秋楽公演まで空席を出すことなく全日程を終了し、冒頭に書かせていただいた感動の千秋楽を迎えることが出来ました。

ここでもう一つの交流を皆様にご紹介したいと思います。出演者と観劇のお客様の交流のみならず、今回の公演では舞台裏でも素晴らしい交流がありました。通常の海外公演では舞台運営スタッフ同士の交流はほとんど期待できません。しかしながら今回の台湾公演では日本人舞台運営スタッフと台湾人舞台運営スタッフが公演終了後 23 時過ぎという遅い時間にも関わらず毎晩“飲み”に繰り出しておりました。こんな経験は初めてです。又、千秋楽公演終了後、一日がかりですべての舞台道具、機材を劇場から搬出を終えたまさしくその瞬間、台湾人スタッフの手でシャンパンが用意され、日本人スタッフに次々と手渡され互いにシャンパンシャワーの饗宴…。握手するもの抱き合って別れを惜しむもの最後は「又、絶対に来るから」と誓い合って別れを惜しむ姿は感動的でさえありました。これまでの海外公演ではありえなかった光景でした。

又、出演者も時間を見つけては街に繰り出し台湾の方々と触れ合った様です。ただでさえ親切な台湾の皆様に親切にしてもらった上に“タカラジェンヌ”であることがわかり更に親切にしてもらったという心温まる皆様との触れ合いや、早朝にホテルを抜け出し公園で行われている太極拳に飛び入り参加してきたといった話題まで台湾の皆様との交流はここで紹介するには紙面がいくら

シャンパンシャワー

あっても足りないぐらい沢山、沢山あったようです。

■第２回台湾公演に向けて

以上、今回の台湾公演は我々自身の口から申し上げるのは恥ずかしいのですが、結果としてパーフェクトな公演として公演を終えることが出来、公演が終わった今もすがすがしさを覚えています。海外公演は非常に大変なプロジェクトで、海外公演が終わると達成感はあるものの、「しばらく海外公演には関わりたくない。」とか、「海外公演はもう懲り懲り。」という声が聞かれるものでした。しかし、今回の公演に参加した者は、「是非もう一度台湾公演は参加したい。」と口々に言います。今回参加できなかった者も、次回台湾公演を実施するのであれば是非是非参加したいと言っているようです。又、台湾の皆様からは、今回はチケットを入手できなかった。是非もう一度台湾に公演に来てほしいという熱いラブコールを色々なところから頂いております。８年振りの海外公演は我々を大きく成長させてくれました。出演者は最後の最後まで、宝塚のそして日本の代表として、自らにプレッシャーを課してより高いクオリティの舞台を台湾の皆様に届けるべく研鑽を重ねました。舞台運営スタッフは国を超えた協力体制のもと国際チームで完璧な仕事をこなしました。我々マネジメントスタッフも台湾プロモーターと共同で公演企画から劇場確保、広告宣伝からチケット販売、そして公演実施までの公演の一連の業務を行いノウハウの蓄積を図ることが出来ました。以上のような状況下、社内ではいつのまにか今回の公演が「第一回台湾公演」と呼ばれるようになっています。今回の様な公演を二回、三回と続けることでもっと、もっと日台間の距離が縮まっていくことを願って、近いうちに第二回台湾公演ができるのであればこれほどうれしいことはありません。

■最後に

第一回（！？）宝塚歌劇団台湾公演実施に際して様々な心配りを見せていただいた関係各位、そして劇場にお越しいただき熱く素直な反応で公演を盛り上げてくださったお客様。私たちが台湾に感謝を込めて舞台をお届けするつもりが、もっと大きな愛を返して下さったオール台湾の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。初日後の新聞に宝塚と台湾は「相思相愛であった」と書かれた報道がありました。まさしく至るところでそれを感じた今回のプロジェクトでした。

（公財）交流協会の皆様をはじめ、本当に多くの皆様のお力添えにより、この台湾公演が実現し、これだけ盛況にプロジェクトを終えることができました。ご協賛、ご後援、ご協力、ご指導いただきましたすべての関係者の皆様に、末尾ではございますが深くお礼を申し上げます。本当に、本当にありがとうございました。謝謝。

以下、関係者の皆さんの感想の一部を列記します。

〈観客の声〉

・衣裳、化粧、大道具とトータルで細部まで演出されている。こんな大衆演劇がいまこそ必要なんです。
・女性が理想の男を演じることに感心する。こんな独特の芸術はない。
・宝塚は男性がいない舞台で清潔感があるのがいい。宝塚の台湾公演があると聞いたときは本当にうれしかった。台湾で宝塚が見られて本当に最高。
・一生懸命に北京語で伝えようとする心が伝わった。東日本大震災支援に対するお礼の言葉にも感動した。来てくれてありがとうと言いたい。
・ダンス、歌、芝居の華やかな演出にクラッときた。
・まじめな劇団。ひたむきさに元気をもらった。

・次回は是非日本での公演をみてみたい。

〈スタッフの声〉

・台湾の舞台スタッフの技量はすごかった。学ぶところが多かった。彼らに負けないように自分たちも頑張らないといけないと気持ちを新たにした。
・興行企画からチケット販売、精算までの一連の過程をすべて体験できて貴重な体験であった。日本国内公演と基本同じスタイルを踏襲すれば海外公演も実施できると確信したが、ミクロな部分では”郷に入れば郷に従え”が重要だと認識した。

〈協力機関・関係団体等の声〉

・日本を代表する「宝塚歌劇団」と共同のプロジェクトをして学ぶところが大きかった。
・”すごい”と思うところも随分多かったが、自分たちが日頃行っていることと同じ部分も数多くあった。
・日本の舞台スタッフは”すごい”。特に照明技術がすごい。あと、舞台の転換の速度がすごく早く、これを着実に処理していく技術に感心した。
・コンテンツがすごい。今後も一緒に日本のライブエンターテイメントを台湾でやって行きたい。
・ようこそ台湾へ。多くの関係者の努力で台湾公演が実現したことに感無量です。

★〈タカラジェンヌ達の声〉★

★（星組トップスター）

柚希　礼音

　代表選手として、かなり、責任を感じて、緊張して臨みました。毎公演終わるたびに、宝塚で今を生きている自分に幸せを感じる日々でした。本当に夢の様な公演でした。皆様本当にありがとうございました。

★（星組娘役トップスター）

夢咲　ねね

　世界は一つだ！！！　そして、宝塚の魅力を再確認しました。

★（星組組長）

万里　柚美

　大歓迎してくださった台湾の皆様と、日本から応援に駆け付けて下さった皆様に心からの感謝でいっぱいです。そして、この公演を第一歩として、また台湾で公演が出来ますようにと願います。

★（星組出演者の皆様）

・お客様の観劇の反応に感動しました。
・台湾公演があるのなら是非また参加したい。
・もう一度台湾に来て欲しいと言われたら嬉しい！
・私たちの舞台が、日本と台湾そして世界が密接になるよう取り組んでいく一助になればと使命を新たにしました。

台湾公演のポスター